

組織学会通信

No.90

2021. 12. 20

【大会関係】

【1】2022年度組織学会年次大会報告

2022年度組織学会年次大会は、鈴木竜太先生を実行委員長とし、神戸大学主催で2021年10月30日(土)、31日(日)に開催され、参加者は、445名(招待者含む)となりました。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、前大会に引き続きオンライン(Zoom)での開催となりました。3回目のオンライン大会ということで、オンライン環境での大会参加にも良い意味で慣れてまいりました。神戸大学の実行委員会の先生方におかれましては、長期間の準備期間を経て、趣向をこらした盛りだくさんのコンテンツをご用意いただき、満足度の高い学会となりました。主催校の神戸大学実行委員の先生方には深く御礼申し上げます。またご登壇された先生方には、コロナ禍の中でのご報告ということもあり、通常の学会発表以上のご負担をおかけいたしました。関係者の皆様のご協力のおかげで、大きなトラブルもなく、無事に大会を終了することができました。

「組織論の現在(知)」という統一テーマのもと、2日間にわたり、「組織論レビュー」、「組織科学編集委員会セッション」、「組織学会会長セッション」、「ランチョンセッション」、「組織論レビュー総括セッション」のバラエティー豊かなセッション開催となりました。「組織論レビュー」では、15会場にて、レビューセッションが行われました。大会1日目には、オンライン総会が開催され、新体制の報告も行われました。

更に、2日間の昼休みにはランチョンセッションが開催されました。1日目は、高橋伸夫新会長により「組織学会との付き合い方を考える」と題して、学会活動の可能性、積極的な学会参加、学会と大会の楽しみ方についてのディスカッションが行われました。そこでは、様々なアイデアや意見が出され、活発な議論が展開されました。また、2日目には、「大学教員のキャリアについて」と題して、加藤寛之先生より、キャリア設計の重要性についてご自身のご経験に基づく貴重なお話をいただきました。若手の研究者にも有益なメッセージをいただきました。

今回は、第2回目となる、「組織論レビュー」の開催を行うことが出来ました。また、「組織科学編集委員会セッション」では、『組織科学』第16回特集論文公募ついて、投稿希望

者からの報告等、実際の投稿について、編集担当より直接アドバイスをいただける機会を得られる有益なセッションとなりました。

充実したセッションの実現にご協力くださった先生方に心より御礼申し上げます。

神戸大学の鈴木竜太先生、服部泰宏先生をはじめ、神戸大学の先生方のご尽力によって、2022年度組織学会年次大会は盛況のうちに幕を閉じることができました。

10月29日(金)には、年次大会に先立ちまして、ドクトラル・コンソーシアムが昨年引き続きオンラインにて開催されました。オーガナイザーの長内厚先生、稲水伸行先生、生稲史彦先生の御尽力に深く御礼申し上げます。また今回、オンラインのドクトラル・コンソーシアムがより有益なものになるように、陰ながらご協力いただいた先生方にもここで御礼申し上げます。

オンライン開催のため、オーガナイザーの先生や参加された皆様方は、長時間パソコンの前に座っての参加となり、随分お疲れになったかと存じますが、充実した時間になったと伺っております。また10月30日(土)にはドクトラル・コンソーシアム参加者だけのオンライン懇親会も開催され、そちらにはシニアの先生方にもご参加いただき、親睦を深められました。

次に大会委員会の活動について御報告いたします。大会委員会からはトランザクションズの改革についてご報告申し上げます。大会終了後に、発表者の中で希望し、かつ、体裁が一定以上整っている原稿を、『組織学会大会論文集』(略称「トランザクションズ」)のJ-STAGE(独立行政法人科学技術振興機構(JST)のオンライン・ジャーナル・システム)に搭載しております。

トランザクションズに掲載された論文は、J-STAGEを経由して、その書誌情報がGoogle Scholarなどに提供され、全世界から英語での論文検索の対象となります。そのため、Referencesをはじめ執筆要綱の遵守が求められます。しかしながら、J-STAGE 登載希望原稿の中には、執筆要綱に準じた執筆ができていないものが依然として多く、大会委員会内に設置されたトランザクションズ編集委員会と事務局にて対応を行ってきました。

しかしそのような対応にも限界があるという認識から、昨年度より、当学会員である大学院生を「編集アシスタント」に任命し、編集作業のお手伝いをさせていただいております。編集アシスタントについての公募の詳細は、後日掲載されます学会ホームページやメールニュース等をご覧ください。編集アシスタントを経験することによって、参考文献の書き方を身に着けるといったメリットもあります。また編集アシスタントに対しては、謝金をお支払いするとともに、学会HPや組織学会通信などでお名前を公表し、履歴書にも記載可

能といたします。我こそはと思われる方は奮ってお申込みくださいますよう、よろしくお願いたします。

大会委員の先生方には、年次大会のセッションの企画にあたり多数のアイデアをいただいたり、登壇者の推薦や依頼をしていただいたりいたしました。またご自身が登壇者になってくださった先生もおられました。大会委員会の先生方のご尽力に、この場をお借りして深く御礼申し上げる次第です。

***2022 年度組織学会研究発表大会(東北大学)のお知らせ**

2022 年度組織学会研究発表大会は、6 月 4 日(土)・5 日(日)に、福嶋路大会実行委員長のもと東北大学にて開催されます。次回の大会もオンラインでの開催となります。今から皆様のご予定を確保していただければと思います。1 月より大会発表の申し込みが始まりますが、発表を予定されている方は、執筆規程、執筆要綱を熟読の上、規定のフォーマットに則った体裁で原稿を作成し、チェックリストにてご確認後に、ご応募くださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

大会委員会担当理事 井上 達彦

2022 年度組織学会年次大会 開催校挨拶

2022 年度組織学会年次大会は、2021 年 10 月 30 日(土)と 31 日(日)に神戸大学を開催校として、秋晴れのもと、昨年度の大阪市立大学大会と 2 年続けてオンラインにて開催いたしました。ゲスト講演を含めた多彩なセッションを揃える例年の大会と異なり、今回の大会は、ほぼ全てのセッションを「組織論レビュー」関連のセッションで揃えるというものでした。実践的な報告ではなく、理論的な報告が主であることから、主催者としても、どれほどの参加人数になるのか全く予想が立たなかったのですが、結果的には 445 名と大変多くのご登録をいただくことができました。

担当理事の福嶋先生をはじめとする大会委員会の先生方、編集委員会セッション、組織論レビューセッションにご登壇いただいた先生方、事務局の樋口様には、心より御礼申し上げます。また、大会運営のノウハウを惜しげもなくご教示くださった大阪市立大学の先生方にも厚く御礼申し上げます。

「組織論の現在地(知)」と題する今回の大会のメインは、なんとと言っても、15 組の若手・中堅研究者、そして各領域のトップランナーたちによる組織論レビューセッションでした。文献のレビューは、およそ全ての研究において、研究者にとっての最も基本的にして最も重要なステップだといえるでしょう。ただ、本企画が目指したのは、経験的な研究の前半パートに収まることを前提としたレビューではなく、それ自体、1 つの完結した地図としてのレビューでした。その領域の研究者の問題意識、その時点での到達点、その領

域が図らずも陥っている問題の構造をビビットに浮かび上がらせ、その領域について明確なイメージを読者に提供してくれるようなレビューを目指したのです。2012年、国士舘大学にて開催された第一回目の組織論レビューの会場で感じた、「〇〇の研究って、そうなっているのだ！」という私たちの感動を再び学会員の皆様にお届けしたい。そんな想いでスタートした企画でした。

本企画のエントリーは、年次大会開催日よりもはるか前の2020年3月末。この日までに我々の手元に届いたエントリーは、実に59組でした。我々の予想、そして第一回目の組織論レビューのエントリー数を遥かに超える会員様よりエントリーをいただくことになりました。その後、匿名レフェリーにより、全59件に対する厳正な審査を行いました。その結果、選ばれたのが、今回発表された15組の先生方ということになります(3名の匿名レフェリーの先生方には、改めて感謝申し上げます)。当日発表された15のセッションすべてにおいて、9年前と同じく、「〇〇の研究って、そうなっているのだ！」という感動をお届けできたと確信しております。

これ以外のセッションとして、ドクトラル・コンソーシアム、『組織科学』編集委員会セッション、そして昼の時間帯に行われたランチョンセッションがありました。

ドクトラル・コンソーシアムでは、非公開ではありましたが、ぜひたくに1日にわたって選ばれた5名の博士課程の学生の研究に対して、長内厚先生をはじめ学会をリードする3名の先生が丁寧に研究へのコメントをされ、濃密なセッションが行われていました。また、組織科学編集委員会セッションにおいては、島本実先生と山田仁一郎先生のリーダーシップのもと、「社会の変化、組織の変化」と題する、『組織科学』CFP連動企画が開催されました。6組の先生方のご報告1つ1つに、両先生が丁寧にコメントをされている様子が大変印象的でした。この2つのセッションから生まれた複数本の論文が、近い将来、組織科学に掲載される日を楽しみ待ちたいと思います。

今回の大会においても、例年通り、2つのランチョンセッションを開催いたしました。初日の30日は、高橋伸夫会長による「組織学会との付き合い方を考える」と題するセッションが、翌日31日には加藤寛之先生による「大学教員のキャリアについて」と題するセッションが、それぞれ開催されました。高橋先生のセッションにおいては、学術的成果を発信するために学会という組織をどのように活用するかというお話、加藤先生のセッションにおいては、若手から中堅にかけてのキャリアの歩みをどのように進めるのか、研究者として独り立ちするまでの苦労と果報とはいかなるものであるかというお話が、お二人のパーソナルな経験談などを交えつつ、ヴィヴィッドに語られました。

大会の最後を彩る組織論レビュー総括セッションにおいては、組織論レビューの登壇者である塩谷剛先生、岩尾俊兵先生、佐々木秀綱先生に、組織論レビュー実行委員会メンバーである高尾義明先生、服部泰宏先生、宮尾学先生を加えた6名により、「良い文献レビュー

一とはどのようなものであり、それはどのようなプロセスで生み出されていくのか」ということに関する議論が行われました。セッションには 200 数十名もの学会員が参加し、盛況のうちに大会を終えることができました。

本来であれば、秋晴れの神戸の街にお越しいただき、学会参加とともに神戸の街や六甲山への散策などを行っていただきたかったのですが、コロナ禍に直面し、2年連続でのオンライン開催を余儀なくされてしまいました。組織論レビュー総括セッションのオンラインルーム設定の手違いなど、会員の皆様にご迷惑をおかけした場面があったとはいえ、総じて、大きなトラブル無く終えることができたと考えております。一重に、多くの学会員のご支援ご協力のお陰でございます。

2022 年度組織学会年次大会が盛会に終わりましたことをここに報告し、開催にご協力いただきました全ての皆様、登壇者の皆様、参加者の皆様に再度、お礼申し上げます。ありがとうございました。

2022 年度組織学会年次大会 実行委員長 鈴木 竜太

2022 年度ドクトラル・コンソーシアム報告

ドクトラル・コンソーシアムは、次世代の組織論研究を担う若手研究者育成を目指して 2001 年度より行われてきたものです。今年度は年次大会に先立ち、10 月 29 日(金)に、昨年に引き続きオンライン方式(Zoom)にて開催されました。参加メンバーと内容は以下の通りです。

	氏 名	所 属
オーガナイザー	長内 厚	早稲田大学大学院 経営管理研究科 教授
	稲水 伸行	東京大学大学院 経済学研究科 准教授
	生稲 史彦	中央大学大学院 戦略経営研究科 教授
参加者	岡部 牧人	筑波大学大学院 ビジネス科学研究科 博士課程
	笠置 宏理	九州大学大学院 経済学府研究科 博士課程
	金子 麻美	立教大学大学院 ビジネスデザイン研究科 博士課程
	吉田 航	東京大学大学院 総合文化研究科 博士課程
	李 樹萱	一橋大学大学院 経営管理研究科 博士課程

前回に引き続き、2 回目のオンライン方式(Zoom)での開催ということで、グループを 2 つに分け、午前・昼(ランチョン)・午後の 3 つのセッションに分けて実施しました。参加者・オーガナイザーともに、朝から夕方まですべてのセッションに参加しました。

午前中は、チーフ・オーガナイザーの長内、オーガナイザーの生稲が担当し、戦略論分野の研究(岡部さん、笠置さん)についてペーパー・ディベロップメント・セッションを行

いました。午後は、オーガナイザーの稲水と生稲が担当し、管理会計と組織の研究（金子さん）、組織論分野の研究（吉田さん）とイノベーション分野の研究（李さん）についてペーパー・ディベロップメント・セッションを行いました。また昼のセッションでは、昨年引き続きランチョン・ミーティングとして、長内、稲水、生稲のオーガナイザー3名が、若手研究者として取り組んで欲しいことをテーマに設定して15分程度のレクチャーを行い、若手と意見交換しました。

当日は、午前10時より全員で簡単な自己紹介を行った後、ペーパー・ディベロップメント・セッションを、10時20分から12時10分までと、13時40分から16時45分までの2回に分け、大学院生5名の論文について、1人50分の時間をとって報告・討議を行いました。各セッションでは、大学院生が自らの論文の内容を、パワーポイントを用いて15分程度で報告した後に、事前に割り当てられた他の大学院生1名が5分間、当該論文の良い点と改善余地のある点について、パワーポイントを用いて報告しました。その後、事前に割り当てられた担当オーガナイザー（教員）がパワーポイントを用いて8分間コメントをし、残りの時間で全員参加のディスカッションを行いました。

以上のペーパー・ディベロップメント・セッションの主目的は、「現在の原稿を学術誌（『組織科学』）への投稿論文に相応しいレベルにまで高めるにはどうしたらよいか」に置かれました。大学院生は、自分および他の大学院生の論文に対するオーガナイザーや他の大学院生からの質問・コメントを聞いて学ぶだけでなく、他の大学院生の論文に対するコメントーターの役を経験しました。他の大学院生の論文にコメントをすることで査読者としての視点を体験し、より幅広い視野から自分の論文や研究を捉える経験を積むことができました。大学院生は皆さん優秀で、またテーマやトピック、方法論も多様でしたので、さまざまな角度から議論をすることができ、有意義な時間が過ごせたと思います。また、今回の参加大学院生は学部から進学した日本人大学院生に加え、社会人大学院生や海外出身大学院生など様々なバックグラウンドの参加者がいた点、更に強調したいのは参加者のジェンダーダイバーシティが広がった点で、より多様性のある議論ができた上に、将来の日本の経営学を担う若手研究者のダイバーシティの促進に寄与できれば幸いです。

午前終了後の昼のランチョン・ミーティングでは、長内、稲水、生稲の3名のオーガナイザーが、これまでの研究活動を振り返り、どのように研究を進めていけばいいのか、あるいはどのような点に注意して投稿論文を執筆していけばいいのか、若手の時にどのようなことを心掛けて欲しいのかといったことをお話いたしました。大学院生の皆さんが今まさに苦勞し悩んでいるようなことに、オーガナイザー自身もかつて苦勞し、悩んだ経験があります。だからこそ、それらの問題にどのように考え、対処していったのかに関し、具体的な体験に基づいて語るようにしました。そのため、大学院生のみならず、私たちオーガナイザー教員にとっても、本当に深い学びを得ることができたと思います。また、オー

ガナイザーがかつて DC で受けた恩を次の世代に送るという思いを強くしました（かつて受けた大恩にはまだまだ至りませんが…）

もう一点付け加えると、ドクトラル・コンソーシアムが長時間にわたるオンライン開催となったため、懇親会は、日を改めて翌日土曜日の 18 時から、こちらもオンライン方式 (Zoom) にて開催しました。オーガナイザー3名と大学院生 5 名、および大学院生の希望を受けてご参加をお願いした、東京都立大学大学院経営学研究科教授の高尾義明先生、神戸大学大学院経営学研究科教授の鈴木竜太先生、筑波大学ビジネスサイエンス系教授の立本博文先生の 3 名の先生方を特別ゲストにお迎えしました。カジュアルな雰囲気の中、交流をし、研究と論文執筆についてざっくばらんに話をすることができました。ご協力を賜りました特別ゲストの先生方には、この場をお借りして心よりお礼を申し上げます。

今回のドクトラル・コンソーシアムも前回に引き続きオンライン開催となり、実施までにはさまざまな紆余曲折もありました。でも、結果としては、オンラインの強みを活かした形で開催でき、例年と同じような内容になったと思います。裏方としてさまざまなご調整を下さった組織学会大会委員先生方、ならびに執行部の諸先生方と開催校の諸先生方、懇親会にご参加いただいた諸先生方、前年度総合・管理担当オーガナイザーであった近能善範先生、その他関係者の皆様方に、心より御礼を申し上げます。

ドクトラル・コンソーシアムに招待されることは大学院生にとって名誉なことであり、またこの会で得られた同世代の若手研究者とのネットワークは貴重な財産となります。我々経営学研究者の多くは、大学の垣根を越えて、この組織学会と、日本の組織学界に育てられたという思いを持つ人が多くいます。若手研究者のみなさんもこの会を通じて築かれた友情がこの後、今後の研究生生活において続くことを願っています。そして、ドクトラル・コンソーシアムでの議論を活かし、一人でも多くの大学院生の皆さんが『組織科学』に論文を掲載できることを強く願っております。

2022 年度担当オーガナイザー 長内 厚、稲水 伸行、生稲 史彦

【2】2022 年度組織学会研究発表大会のお知らせと公募要領

2022 年度組織学会研究発表大会は、2022 年 6 月 4 日(土)・5 日(日)の両日、東北大学を開催校としてオンラインにて開催されます。

2020 年に引き続き 2021 年もコロナ禍に翻弄された 1 年でした。2022 年度の研究発表大会も、感染拡大の状況が不確定でございますので、オンラインでの開催を早めに決定し、その分万全な準備の下で充実したものになりますよう尽力いたします。

研究発表大会は、自由論題による研究発表の場です。ご報告される会員の皆様が主役となります。皆様の積極的なご報告をお願い申し上げます。さらに、アイリスオーヤマ株式

会社、大山健太郎会長による特別講演を予定しております。大山氏は、生活用品の企画、製造、販売を営むアイリスオーヤマ株式会社を創業し、従業員 5 人からスタートした同社を、4000 人超の大企業に育てあげました。同社は新製品開発比率の高さでも日本でも有数の企業として知られています。さらに大山会長は、東日本大震災後に東北地方の経営人材の育成や中小・ベンチャー企業の支援にご尽力されました。ご講演の中で、大山会長の「変化がビッグチャンス」という独自の経営哲学やこれまでのご経験に関する興味深いお話が伺えると思います。

開催校一同、会員の皆様のご参加を心よりお待ちしております。

1. スケジュール

2022 年 1 月 20 日（木）～3 月 10 日（木）	演題登録・報告完成原稿受付期間
2022 年 1 月 20 日（木）～5 月 20 日（金）	事前参加申込受付期間
2022 年 4 月上旬	大会報告審査結果通知
2022 年 5 月上旬	大会プログラムの公開

2. 演題登録と報告完成原稿の提出

組織学会 Web サイトからリンクをたどっていただき、2022 年度組織学会研究発表大会専用ウェブサイト(Confit)にログイン(要会員番号。組織学会から郵送される封筒の宛名ラベル右下に会員番号の記載がありますので、ご参照ください)し、演題、キーワードを登録してください。キーワードは、セッション編成時の基準となりますため、以下の中からご自身の研究にあてはまるものを選んでください。

【方法論】 定量分析、定性分析、歴史研究、理論研究、文献レビュー（1 つ選択）

【分野】 ミクロ組織、マクロ組織、人的資源管理、経営戦略、国際経営、マーケティング、技術・生産管理、イノベーション、企業家、経済学、法学、行政学、社会学、心理学、工学（2 つまで選択）

事前参加登録および演題登録をした上で、Confit の原稿提出画面より報告完成原稿を提出してください。締切日(3 月 10 日)以降、登録情報(タイトル名、報告者名、複数で発表する場合は名前の順番、等)の変更は一切認められません。変更の場合、報告をご辞退いただくことになります。

※なお、報告応募をされる場合には、事前参加申込を行わないと先に進めませんので、ご注意ください。

報告完成原稿は、『トランザクションズ』（『組織学会大会論文集』*Transactions of the Academic Association for Organizational Science*）掲載希望の有無に関わらず、執筆要綱に基づき、指定のテンプレートを用いて作成された原稿を受け付けます。提出前にはチェ

ックリストを参照し、要件をすべて満たしているかをご確認ください。これまでの大会でも、テンプレート不使用、ページ数超過、行数字数やフォントサイズの変更、キーワード不在などがみられました。執筆要綱に則っていない原稿は、リジェクトされることがあります。

なお、『トランザクションズ』に掲載された論文は、公表論文として取り扱われます。他の学会報告や論文集の掲載等の二重投稿には十分ご留意いただき、『トランザクションズ』への掲載を望まない場合は原稿提出時に Web 上の「望まない」を選択してください。

3. セッションの種類とそれぞれの申込資格

演題登録時に、次のどちらかを選択していただくことになります。

(1) **研究発表セッション**：組織学会正会員(会費滞納者は不可)による自由論題の研究報告で、セッションは発表と質疑応答を含め 25 分となります。

(2) **大学院生セッション**：組織学会正会員(会費滞納者は不可)の大学院生(報告時に正規の大学院生として在籍していること)による自由論題の単独での研究報告です。セッションは報告 15 分、質疑応答 10 分、総計 25 分です。報告者の中から、大会委員会で選ばれた方を秋の年次大会時に開催するドクトラル・コンソーシアムにご招待申し上げます。

4. 採否の決定

複数の査読者が完成原稿を査読し、採否を決定し、2022 年 4 月上旬までに、筆頭報告者(ファースト・オーサー)に審査結果を電子メールにて通知します。

なお、トランザクションズ掲載可になった報告論文については、後日、大会委員会内に設置されたトランザクションズ編集委員会が、必要に応じて一度だけ修正要求を出すことがあります。執筆要綱に則っていない原稿については、トランザクションズ編集委員会または J-STAGE 側からリジェクトされることがあります。

特に、参考文献リスト(References)の完全性は掲載の必須要件となっておりますので、投稿者の責任において細心の注意を払ってご作成ください。

2022 年度組織学会研究発表大会 実行委員長 福嶋 路

【3】ドクトラル・コンソーシアムについて

6 月の研究発表大会の大学院生セッションで報告した方の中から、大会委員会を選んだ大学院生を、その年の秋の年次大会時に開催する「ドクトラル・コンソーシアム」(ドクコン)にご招待いたします。大会委員会の選考基準は「組織科学に投稿して採択されるような論文になることが期待される報告」です。大会委員会で選ばれた方には、研究発表大会終了直後に「インビテーション・レター」をお送りいたします。ドクトラル・コンソーシア

ムはその年の年次大会前日にほぼ丸一日かけて開催されますので、ドクトラル・コンソーシアムご参加の意思確認をいたします。ドクトラル・コンソーシアム参加者の当該年次大会の参加費は免除します。

ドクトラル・コンソーシアムは、いわゆる Paper Development Session です。ドクトラル・コンソーシアム参加者は、全員が『組織科学』仕様の(投稿規定に則った)論文を持ち寄り、オーガナイザーの指導の下、互いに切磋琢磨することを求められます。ドクトラル・コンソーシアム提出論文は、「組織学会ドクトラル・コンソーシアム査読付報告論文」と明記できるようになりますが、それに満足することなく、ドクトラル・コンソーシアム終了後できるだけ速やかに修正し、『組織科学』等に投稿されることを強く希望いたします。

そして、ドクトラル・コンソーシアム開催日の夜(年次大会前夜)は、ドクトラル・コンソーシアム参加者のご希望にできるだけ沿えるよう、数人のシニアの学会員をお呼びして、懇親会も開かれます。くつろいだ雰囲気の中で、先輩研究者とのカジュアルな対話を通して、良い研究とはどのようなものか、研究を行う上での手ごかりや悩み、研究者としてのあり方などを考える贅沢な時間をお楽しみください。

ドクトラル・コンソーシアムに関心を持たれた大学院生の会員は、まずは研究発表大会での大学院生セッションでの報告に奮ってご応募ください。それがドクトラル・コンソーシアム「インビテーション・レター」への最初の一步となります。

大会委員会

【4】2023年度組織学会年次大会のご案内と開催校挨拶

2023年度組織学会年次大会は、2022年10月1日(土)・2日(日)に武蔵大学(東京都練馬区)にて開催されることとなりました。

年次大会のテーマは「対話としての経営学」と題して開催したいと考えております。

経営分野での研究は日々蓄積されており、領域ごとに、更には領域内でも細分化されてきております。2022年度組織学会年次大会(神戸大学)では、同様の概念が他の別の場所で議論されていることや、過去に議論された概念がそのことを忘れたかのように再び別の概念として議論にされているという問題意識から、組織を対象とした研究を俯瞰する狙いでマイクロ組織論、マクロ組織論、イノベーション論など、経営学を構成する各領域の文献レビューの成果が報告されました。

本大会は、その成果をさらに発展させ、学会員の方々に専門分野以外の領域との接点を提供することを目的に「対話」というキーワードを設定しました。リーダーシップ、マーケティング、イノベーション、組織学習などの領域での専門家同士がセッションのテーマに関し対話形式で議論を交わしていただきます。それと同時に、異なる専門性をお持ちの

学会員の方々にも対話にご参加いただくことで、新たな気づきを得るきっかけにさせていただきたいと考えております。

具体的には、80分のテーマセッションを設置します。各領域の専門家の方にセッションリーダーをお願いし、登壇者を集め議論を深めていただきます。セッションリーダーは組織学会の会員のみ限定せず、隣接領域の研究者の方にも打診しております。心理学など本学会と隣接する領域のセッションも設けたいと思っております。

また、各セッションは、研究者に限定せずに実務家の方にも登壇していただけるように準備を進めています。学会員の方が専門領域以外の関連セッションに参加する機会を広く提供するために、できる限り多くのセッションを設けるよう努めてまいります。まだ具体的な設計はできておりませんが、セッションは登壇者同士の対話だけでなく、学会員の方々とともに多面的な討議ができるような雰囲気づくりを目指しております。

大会のプログラムにつきましては、前々年度の大阪市立大学大会、前年度の神戸大学大会同様に、開催校単独ではなく、開催校と組織学会大会委員会内に設置された年次大会企画委員会との協議によって編成を進めていく予定でございます。

また、大会テーマとは別に、基調講演を行う予定です。本学の所在する練馬は、日本のアニメ製作が本格的に始まった「ジャパンアニメーション発祥の地」であり、日本初の劇場用長編アニメ「白蛇伝」や日本初の連続TVアニメ「鉄腕アトム」が製作された「アニメ・イチバンのまち」です。そのような土地柄であることから、アニメに関連する方にスピーカーをお願いし、学会員の方々とともに対話をしていただく企画を検討しております。

年次大会の開催形態に関しては、新型コロナウイルス感染症の感染状況次第ではございますが、「対面開催」で準備を進めています。前々年度の大阪市立大学大会、前年度の神戸大学大会がオンライン開催であったため、大会実行委員会としては、本大会は「対面開催」をなんとか実現させたいと考えております。また、対面開催が実現しますと、東京で開催する年次大会では、2018年度（2017年11月11日・12日）の首都大学東京（現・東京都立大学）以来の開催になります。

開催校を務めます武蔵大学のその前身は1922年に創立された我が国初の七年制私立高等学校である旧制武蔵高等学校です。来年（2022年）には学園創立百周年を迎えます。武蔵大学の属している武蔵学園（武蔵大学、武蔵高等学校・中学校）では「自ら調べ自ら考える力」を身につける教育を重視し、世界に雄飛できる人物を育成する事に全力を尽くしています。武蔵大学は来年4月に国際教養学部が開設され、既存の経済学部、人文学部、社会学部と合わせ4学部体制になります。一学年全体で1,000人（全学年4,000人）という極めて小規模の大学ですが、世界に開かれたリベラルアーツ・サイエンスの学園を目指し、新たな基軸のグローバル教育を進めています。学園創立百周年の年に組織学会が開催できることはこの上ない幸せです。

対面開催が実現した際には、是非とも武蔵大学にお越してください。武蔵高等学校・中学校と同じ敷地内にあるこぢんまりとしたキャンパスですが、緑が豊かで、建物の中には、都内でも珍しい関東大震災、空襲、東日本大震災を経験した建物（3号館）がございます。本学への3つの駅よりアクセス可能です。西武池袋線「江古田駅」（駅より徒歩6分）、都営大江戸線「新江古田駅」（駅より徒歩7分）、西武有楽町線「新桜台駅」（駅より徒歩5分）が最寄り駅となります。池袋や新宿へもアクセスが良く、交通の便は悪くありません。対面開催となった場合の宿泊先等につきましては、申し訳ございませんが、開催校にて確保する予定はありません。池袋駅や新宿駅周辺など、お早めに各自宿泊予約をご検討ください。

また、大会申込等については、お馴染みとなってきました Confit より、事前申込いただく予定です。詳細は追ってお知らせいたします。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。

2023 年度組織学会年次大会 実行委員長 伊藤 誠悟
実行委員会一同

【 2021 年度(第 17 期)決算報告 】

2021 年 10 月 30 日開催の組織学会会員総会において、2021 年度（第 17 期）の決算報告が承認されました。

第17期 特定非営利活動に係る事業会計

活 動 計 算 書

自 令和 2年 9月 1日 ～ 至 令和 3年 8月 31日

特定非営利活動法人 組織学会
(単位：円)

科 目	金 額		
I 経常収益			
1 受取会費			
個人会員 受取会費	24,988,000		
団体会員 受取会費	760,000	25,748,000	
2 事業収益			
定例研究会参加費	0		
年次大会参加費	802,000		
研究発表大会参加費	828,000	1,630,000	
3 その他収益			
雑収入	0		
受取利息	51	51	
経常収益 計			27,378,051
II 経常費用			
1 事業費			
(1) 人件費			
給料手当	4,409,775		
法定福利費	753,788		
人件費計	5,163,563		
(2) その他経費			
大会委員会費	2,131,347		
組織科学編集委員会費	9,121,778		
学会賞委員会費	454,286		
企画・定例会委員会費	199,015		
支部研究費	31,570		
総務委員会費	2,356,466		
広報委員会費	201,960		
国際委員会費	300,000		
その他経費計	14,796,422		
事業費 計		19,959,985	
2 管理費			
(1) 人件費			
給料手当	4,409,775		
法定福利費	753,788		
人件費計	5,163,563		
(2) その他経費			
振込手数料	27,958		
ソフトウェア利用費	133,584		
支払家賃費	1,761,809		
会計顧問料	209,000		
その他経費計	2,132,351		
管理費 計		7,295,914	
経常費用 計			27,255,899
当期経常増減額			122,152
III 経常外収益			
経常外収益 計	2,963	2,963	2,963
IV 経常外費用			
経常外費用 計	660	660	660
当期正味財産増減額			124,455
前期繰越正味財産額			74,341,654
次期繰越正味財産額			74,466,109

【 2022 年度(第 18 期) 予算 】

2021 年 10 月 30 日開催の組織学会会員総会において、2022 年度（第 18 期）の予算が承認されました。

— 第18期 予算書 —

自 2021年9月 1日
至 2022年8月31日

(単位: 円)

科 目	予算額	備考
I 収入の部		
1 会員会費収入		
個人会員分	24,564,000	
団体会員分	720,000	
2 定例研究会参加費	400,000	
3 研究発表大会・年次大会参加費	1,600,000	
4 雑収入	100,000	
当期収入合計(A)	27,384,000	
期首収支差額(前期繰り越し金)	42,918,011	
収入合計(B)	70,302,011	
II 支出の部		
1 事業費	24,565,000	
大会委員会費	4,325,000	
組織科学編集委員会費	13,860,000	
学会賞委員会費(高宮賞)	500,000	
企画・定例委員会費	900,000	
支部研究費	300,000	
総務委員会費	2,830,000	
広報委員会	950,000	
国際委員会	900,000	
2 管理費	12,670,000	
給与手当	8,400,000	
臨時給与	50,000	
法定福利費	1,600,000	
振込手数料	40,000	
什器備品費	300,000	
ソフトウェア利用費	220,000	
支払家賃	1,850,000	
会計事務所顧問料	210,000	
3 予備費	50,000	
当期支出合計(C)	37,285,000	
当期収支差額(A)-(C)	△ 9,901,000	
次期繰越収支差額(B)-(C)	33,017,011	

【 総 務 関 係 】

【1】年会費納入のお願い

既にご案内のとおり、2021年9月1日より2022年度(第18期)に入っております。つきましては、お早めに年会費のご納入をお願いいたします。

1. 口座振替(自動引落)の方

2021年9月27日にご指定の口座から振替いたしました。何らかの理由で振替できなかった場合には、事務局よりご連絡を差し上げております。

2. 請求書処理の方

今年度分の請求書は、2022年4月の発行・送付となります。

期間内に上記2つの支払方法へのお申し込みをいただいていない方には、従来どおりのゆうちょ銀行「払込取扱票」をお送りしておりますので、窓口にてお手続きください。

※一部会員には滞納や支払遅延がみられ、予算執行上の扱いや決算時の未払い処理等で運営上の問題が発生しております。会員の皆様には、くれぐれもお忘れなく会費をお支払いいただきますよう、よろしくをお願いいたします。

【2022年度 若手学会員を対象とする研究支援について】

組織学会では、組織研究を活性化するために、若手学会員の英文論文の執筆・発表や共同研究等を奨励・促進する研究支援を、下記の通り実施します。

＝ 記 ＝

A) 英文論文の校正支援(1件当たり5万円)

(1) 支援内容

- ① 組織科学英文年報や国際ジャーナルに英文論文を投稿する論文、国際コンファレンスや海外の学会で発表するフルペーパー(アブストラクトのみの場合は支援対象外)の英文校正費用を対象として、1件当たり5万円を研究奨励金として組織学会より補助します。

(2) 応募条件

- ① 応募締切時において40歳未満の正会員が第一著者であることが必要です。
- ② 再応募も可能ですが、一度支援を受けた場合には、最低2年間は再応募できないものとします。

(3) 応募手続

- ① 応募者の連絡先や投稿先などを、規定のフォーマット(組織学会ホームページに掲載)により申請してください。
- ② すでに投稿済みの場合には、受理レター(プリントアウト・コピー等でも可)を添付してください。
- ③ 締切は年3回(12月・3月・6月)設けます。2021年度は、2021年12月3日(金)、2022年3月4日(金)、6月3日(金)を期日とします。
- ④ 組織学会事務局宛に、必要書類を添付ファイルとして電子メールで送付してください。受付は締切日の17時までとします。

(4) 支援決定後の手続等

- ① 支援決定後に投稿する場合は、研究奨励費受領から1年以内に投稿することが望まれます。投稿後は、受理レター(プリントアウト・コピー等でも可)を組織学会に提出してください。
- ② 学術ジャーナル・学会予稿集などに採択され、掲載が決定した場合には、掲載論文に組織学会より補助を受けている旨を明記し、抜き刷り(電子ファイルもしくはハードコピー3部)を組織学会事務局に提出してください。

B) 若手会員を中心とする共同研究(1件当たり10万円)

(1) 支援内容

- ① 代表者およびメンバーの半数以上が、応募締切時点で40歳未満の正会員である共同研究を対象として、1件当たり10万円を研究奨励金として組織学会より補助します。

(2) 応募条件

- ① 共同研究のメンバー全員が正会員で、代表者およびメンバーの半数以上が応募締切時点で40歳未満であることが必要です。
- ② メンバーの所属先は、複数の機関であることが望まれます。
- ③ 継続申請も可能ですが、原則として最長2年までとします。

(3) 応募手続

- ④ 参加メンバー氏名、研究テーマおよび内容等を、規定のフォーマット(組織学会ホームページに掲載)により申請してください。
- ⑤ 締切は年1回(3月)設けます。2022年度は、2022年3月18日(金)を期日とします。
- ⑥ 組織学会事務局宛に、必要書類を添付ファイルとして電子メールで送付してください。

(4) 支援決定後の手続等

- ⑦ 研究グループは自らの責任において活動し、研究奨励費受領から1年以内に研究成果報告書を、組織学会事務局宛に提出してください。研究成果報告書は、組織学会ホームページで公開します。
- ⑧ 研究成果については、研究発表大会・年次大会などで発表することが望まれます。他学会等で研究成果を発表する際には、組織学会からの補助を受けている旨を明示してください。論文などとして学術誌等に掲載が決定した場合には、組織学会より補助を受けている旨を明記し、抜き刷り(電子ファイルもしくはハードコピー3部)を組織学会事務局に提出してください。

【事務局より】

【1】年末年始休業について

事務局は、2021年12月29日(水)より2022年1月3日(月)まで、お休みさせていただきます。

【2】会員情報の登録変更について

会員データ登録内容(所属、住所、電話、FAX、メールアドレス等)に変更が生じた場合は、必ず直接事務局へ、お早めにご連絡くださいますようお願いいたします。

「会員情報変更届」ご提出のお願い

組織学会ホームページの「会員情報変更」より、「会員情報変更届」のフォーマットをダウンロードいただき、変更事項を入力のうえ、メール添付にて、組織学会事務局までお送りください。

会員情報変更ページ：<https://www.aaos.or.jp/mypage>

件名：組織学会会員情報変更

お送り先：「soshiki【at】rio.odn.ne.jp」※【@を入れてください】

※事務局に直接情報が届きませんと会員情報の変更はできませんので、ご注意ください。

組織学会通信 第90号

2020年12月20日

発行 特定非営利活動法人 組織学会
事務局

〒100-0005 東京都千代田区丸の内2-5-2
三菱ビル 地下1F 171 区外

TEL : 03-5220-2896

FAX : 03-5220-2968

URL : <https://www.aaos.or.jp>